

乳癌に対する根治性と整容性を考慮した手術法の比較検討

1. 研究の対象

2012年4月から2025年12月に当院で施行された乳癌手術のうち、乳房全切除術+同時再建、または乳房温存オンコプラスティックサージャリーを受けられた方。

2. 研究の概要

研究期間：総長の研究実施許可日～2027年3月31日

研究目的：乳癌の根治性と整容性を追求した手術として、乳房全切除術+再建に加え、乳房温存オンコプラスティックサージャリー(OPBCS)があります。

OPBCSにおいては、できる限り目立たない位置に小さな切開を加えることで整容性に配慮し、切除量が少なく腫瘍が創部から離れている場合は、内視鏡を用いた乳房部分切除術を行い、乳腺の周囲組織を移動して自然な形に整える手術(volume displacement)を行っています。切除量が多い場合には他の部位の組織を利用する方法(volume replacement)として、主に広背筋皮弁(LD)を用いますが、胸背部脂肪筋膜弁(thoracodorsal adipofascial flap)や腹部前進皮弁(abdominal advancement flap)なども症例に応じて使い分けています。また、LDでは背部に切開を加えない内視鏡を用いた方法も導入しています。

一方、乳房全切除後の再建においても、患者さんの状態や希望に応じて、LDの他、ティッシュエキスパンダー(TE)や、深下腹壁動脈穿通枝皮弁など、複数の方法から適切な再建法を選択しています。乳房全切除術については、原則として乳頭乳輪温存乳房切除術(NSM)、皮膚温存乳房切除術(SSM)、乳頭切除・乳輪温存乳房切除術(ASM)を選択しております。近年では、整容性と低侵襲性をさらに高めるため、NSMやASMの際には内視鏡下・ロボット支援下手術を、TE挿入を行う際にも、内視鏡を活用した手術を積極的に導入しています。

これらの新たな術式や技術は多くの利点を有すると考えられている一方で、従来法との安全性(合併症等)、有効性(再発率・生存率等)、整容性等の十分な比較検証がなされているとは言えません。これらを検討することは、根治性と整容性のバランスを考慮した手術法の標準化と最適化に寄与し、患者さんの生活の質(QOL)向上と満足度の向上に貢献できると考えております。

研究方法：電子カルテから研究対象者の方のデータを抽出し後方視的に解析を行います。

3. 研究に用いる試料・情報の種類

情報：病歴、患者背景、臨床病理学的背景、皮膚切開創の位置と長さ、手術時間、出血量、切除重量、再建重量、乳頭乳輪壊死を含む合併症、腫瘍学的転帰、整容性、カルテ番号 等

4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。
ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。
また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としませんので、下記の連絡先までお申出ください。
その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

大阪国際がんセンター 乳腺・内分泌外科 研究責任者 奥野 潤

住所：〒541-8567 大阪市中央区大手前3-1-69

電話：06-6945-1181

-----以上